心肺蘇生法に神様は必要か？

　どうして頷いてしまったのか。理由は未だに分からないが、頷いたその瞬間から、俺はもう後悔していた。そりゃあそうだろう。あんな『心臓を止めてくれ』なんてふざけたお願いを聞いてしまったんだ。

　だが、俺はこの妖精モドキの頼みを引き受けてしまった。一度『ＹＥＳ』と言ってしまったものを、都合が悪いからといって簡単に覆すわけにはいかない。こちとら男。そのくらいのプライドはある。

　そういう訳で、俺は『妖精モドキと八人の神様』ｖｓ『タンタロス達』の戦い巻き込まれることになった。具体的に何をどうすればいいのかは実はまだ良く分かってはいないのだが……とにかく妖精モドキの話を聞くに、俺は『自分の心臓を止める』必要があるらしい。

　何度聞いても阿呆らしいことこの上ない。一体この妖精モドキは、命を何だと思っているのだろうか。

　一応、心肺蘇生は試みてくれるらしいが……さて、俺の命は後どれくらい持つんだろうな。

「取り敢えず、今後の私……いえ、私達の計画をお話しましょうか」

「計画？　そんなもんあったのか？」

「当たり前ですよ……」

　思わず呟いてた俺の一言に、妖精モドキが呆れたようにジト目を向けてくる。

　だが、こう思ってしまったのも仕方がないだろう。

タンタロスに奇襲を仕掛けられ、慌ててそれに応戦し、負けて逃げ帰ってきたのが昨日。そしてこっちの世界に来てから俺をついうっかり殺し、さらには連れである『八人の神様の内の一人』とはぐれ、何故か復活した俺を追って妖精モドキは俺を尾行。しかし見つかってしまい、色々事情を説明し、はぐれた神様を追って外に出て、帰りにテュポーンとヤラと出会い、これまた何故かそいつの撃退に成功。さらにははぐれた神様の消息もどうやら妖精モドキは掴めたようで――じゃないと『探す必要が無くなった』とはならんだろうから、ここはこういう認識でいいはずだ――無事に俺達は次の日の朝日を迎えることとなる。

で、次の日、妖精モドキの事情を本人から説明してもらい、今に至るわけだ。

　ここのどこに、『計画』らしきものがあったのか……甚だ疑問に思う俺だった。

「瞬様……？　何か失礼な事を考えていらっしゃいませんか？」

「気のせいだ」

　ジト目をさらに強める妖精モドキに、俺は即答する。これは『思って当然の事』であり、断じて『失礼な事を考えていた』訳では無い。嘘は言ってないと断言できるぞ。

「それよりも、だ。さっさとその『計画』とやらを俺に話せ。ついでに、はぐれた神様を、どうして『探す必要が無くなった』のかもな」

　妖精モドキが何かを言おうとする前に、俺はそう言った。

　これ以上『失礼がうんぬんかんぬん』という話をすると、長くなりそうだったしな。

　妖精モドキは暫し逡巡する。どうも、俺の後半の質問に関しては、こいつは答え辛いらしい。

　そうも考え込まれると、かえって気になるんだが……さて、どうしたものか……。

「……分かりました。取り敢えず、はぐれてしまった神が、今どこにいるのかお答えしましょう」

　どうやって妖精モドキに吐かせようか、いっそまたＧを使おうか、と思っていたところで、妖精モドキが観念したようにそう呟く。

　てか、お前。何か顔が青いけど、もしかして俺がＧを使って色々やらかそうとしていることに気がついたのか？　だとしたら、凄い予知能力だが……

　これはもしかして、使える？

　と、黒いことを考える俺をよそに、妖精モドキは俺の胸を指差した。

「……ん？　どうした？」

「そこです」

　そう言われて、俺は指が向いている先に目を向ける。そこにはシミ一つ無い、黒いシャツがあるだけだった。

　小さい虫でもついているのかと目を凝らすも、何も無い。

「私が昨日探していた神は、そこにいます」

　あー、なるほどね。シャツじゃなくて、もっと内側のことだったのか。

「……は？」

「いや、だから。私が昨日、瞬様と一緒に探していた神は、そこにいるんですってば」

「……あー、そういうこと」

　じゃ、ねーよ！

　と、心の中で俺は叫ぶ。どうやら、俺の頭と体は、妖精モドキの言ったことの理解に追いついていないらしい。

　何とか脳内ハードディスクが今の発言に対する処理を始め、それから数十秒かけてその処理を終わらせた俺は、

「……そういうことだ。説明してくれ」

　当たり前だが、理解出来ない部分が多々あったので、解説を求めるのだった。

「……はぁ。色々意味が分からんが、取り敢えずは『分かった』ということにしておこうか」

　それから数十分かけて、妖精モドキから『自魂蘇生術』なる魔法？　術式？　のことを教えてもらい、『へえ、そんなのあるんだ』といった程度には理解したところで、ベッドにうつ伏せでダイブした。

　完璧に理解出来なかったのは、俺の理解力が無いからでは無い。間違いなく妖精モドキの教え方が下手なのだ。

　いや、『下手』というよりは『まだ何かを隠している』といったところか。どうも妖精モドキは、その『自魂蘇生術』について、あまり多くのことを話さないように、それを俺に施した神様から言われているらしい。

　というか、そもそもその『神様』についての情報を、本人が俺に隠したいようで、妖精モドキも自由に話せないようだった。まあ、嘘は言っていないのは分かるから、諸々のクレームはその『神様』にぶつけたいところなのだが……それにしたって、今の俺の心境は複雑極まりない。

　まあ、それは置いておいて、だ。俺は、うつ伏せになりながら、息を細く吐いた。

　何だか、さっきから胸が……ちょうど妖精モドキが指差した辺りが痛いのだ。というか、何か内側から殴られているような感覚である。

　これは一体なんだ？　直感的には……『得体のしれない何か』から警告されているように思えるのだが……

「で、瞬様。今後の『計画』についてですが」

　そして妖精モドキはそんな俺に構うことなく、話を続ける。

いや、いいんだけどな。話を続けてほしいのは俺も同じだしさ。でも、こうなったのは誰のせいかを考えると、もうちょっと労わりの言葉とか掛けてくれればいいのにな、と思った俺は誰にも責められないだろう。

いや、無駄なことはこの際いいや。妖精モドキの話を聞くか。

そう思った俺は、ベッドの上で居住まいを正した。

そしてそんな俺の様子に満足したのか、妖精モドキはフフンと口角を上げると、

「まずは、今この場にいない『七人の神』を探しましょう」

　そう言ってきた。